様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 １０ 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６５８２

研究課題名（和文）インド・アッサム州の農業低開発への再評価－「アッサム型」持続的農業の可能性

研究課題名（英文）Re-evaluation of sustainability of agriculture in Assam, India

研究代表者
浅田　晴久（Asada, Haruhisa）

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：２０７１３０５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、インド・アッサム州で農業開発が進まない要因について、地域特有の多民族社会の特性から明らかにした。アッサム州で多数派を占めているアーリア系在来ヒンドゥー教徒（アホミヤ）の村落では農業新技術の導入がほとんど起こっていない一方で農業離れが始まっており、農業土地利用も徐々に変化している。アンケート調査と聞き取り調査の結果、近隣村落の他の民族ではアホミヤと社会経済状況がまったく異なっており、農業開発の意味合いも民族によって異なっていることが分かった。民族間の関係性を積極的に評価することが、アッサム州の農業の持続性にとって重要であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study tried to understand the reason of underdevelopment in agriculture in Assam, India from the perspective of multi-ethnic society which is inherent in the region. From questionnaire survey and hearing survey, it is revealed that socio-economic status of ethnic groups in Assam is significantly different and the importance of agricultural development is also different among ethnic groups. Especially, in the village of indigenous non-tribal Hindu groups called Axamiya which population dominates in the state, interest in agriculture become lower recently which leads farm abandonment and changing agricultural land use. The inter-ethnic relationship is one of the key factor for sustainability of agriculture in Assam.

研究分野：南アジア地域研究

キーワード：アッサム州　ヒンドゥー　ムスリム　ボド　ネパリ　土地利用　生業変容　農業技術

１．研究開始当初の背景

インド北東部のアッサム州では、地域内循環とローカルな氾濫原の自然環境に適応した稲作技術が多数残されている。インドの他地域では外部資材の高投入による画一的な技術が普及する中、当地域では社会的条件・環境的条件に主体的に適応した農民の知恵が生み出した農法に依拠した農業が展開されている。代表者は 2007 年以来、アッサム州の村落でフィールドワークを継続しており、多数の村落を訪問して稲作技術を調査・検討してきた。その結果、アッサム州では近代農業は浸透していないが、氾濫原の自然環境に適した持続的な農業を支える技術が多数発達していることが分かってきた。現在もアッサム州で展開している農業は地形や水文環境など氾濫原の環境を利用し、社会的環境にも適合した技術体系である。農民たちは近代農業のうち品種などを選択的に現地の条件に適応した形で導入している。

従来の研究ではアッサム州はインド国内では最も農業開発が遅れている地域とみなされ、低開発に起因する社会の不安定さが問題とされてきた。したがって、「アッサム型」農業の現状をこれまでとは異なる視点より明らかにし、新たな持続的農業発展の具体的可能性を論じることが必要とされている。近代農業の脆弱性を克服するためにも、アッサム州で展開しているユニークな農業と農村社会の特徴を明らかにすることが求められている。

２．研究の目的

本研究では「アッサム型」持続的農業の存続を可能にしている社会経済的な条件を生態環境要因とともに明らかにし、画一的な近代農業に替わる一つのモデルとして示すことを目的とする。そのために、農業の低開発が社会の不安定性を招いているという既存の視点を改めて、地域特有の社会条件、つまり多民族から成るアッサム州社会の特性ゆえに、農業近代化の移行が不要であるという新しい視点を取り入れる。

まず、アッサム州内に複数の調査村落を設定し、村落外からの技術導入の経緯とその影響、在来技術の有効性などを明らかにし、農民が主体的に技術を展開させてきた社会的背景を考察する。さらに、個別世帯の技術利用状況の分析に終始するのではなく、人やモノが村落の内外でどのように移動しているかを詳細に追跡し、都市から村落までスケールから地域の特性を把握する。

３．研究の方法

アッサム州の複数の調査村落で雨季と乾季に行う現地調査が本研究の中心である。現地調査は期間中に 9 回実施した。調査村落は州の中心都市グワハティ近郊のムクタプル村を拠点に、異なる民族が暮らす村を県内で複数設定する。ゴウハティ大学地理学科助教ニッタナンダ・デカ氏の協力を得て、各調査村落で世帯基礎情報と農業土地利用に関するアンケート調査を実施した。アンケート結果を基にして農家から個別に聞き取り調査を行った。必要に応じて地形図、センサスのデータを入手して時代変化も考察した。

４．研究成果

（１）アッサム州で多数派を占めるアーリア系在来ヒンドゥー教徒（アホミヤ）の村落において、アンケート調査の比較によって過去 10 年間の変化を追ったところ、多くの世帯で高学歴化や少子化が進行し、新たに農業以外のビジネスを始める世帯も増えている一方で、土地所有や耕作形態はほとんど変化しておらず、村内の世帯の多くが村から離れることなく現金収入源を増やしている実態が明らかにされた。アッサム州の中で比較的広い土地面積を所有しているアホミヤであるが、農業技術の革新・生産性の向上がじゅうぶん見られないうちに、農業への意欲が低下し、その結果、家計収入の中心が村内の農外ビジネスや都市部のサービス業へ移行している。

（２）アホミヤ、在来トライブであるボド、外来ヒンドゥー教徒であるネパリ、外来ムスリムであるベンガリの村落でそれぞれアンケート調査を行い、民族間の社会経済状況を比較したところ、有意な差異が見られた。アホミヤは所有している土地面積が大きいが農業への関心は低く、教育を受けて都市部で正規雇用職に就く者が多い。ボドは正規雇用職に就く者もいるが、教育水準は高くなく農業や日雇いで暮らすものも多い。これら 2 つの在来グループは土地へのこだわりが強く、農外就職しても出身村落から離れないものが多いという特徴がある。ネパリは土地面積に余裕があるが教育水準も高く州の内外へビジネスのために移動する割合が高い。ベンガリは最後に移住してきたために世帯あたり土地面積が少なく教育水準も低いために州内での就職を目指すのではなく州外への出稼ぎに出るものが多い。これら 2 つの外来グループは土地にこだわらずに現金収入を求めて積極的に外に出るネットワーク型と特徴づけられた。アッサム州では多数の民族が地理的に近接したエリアに居住しているが、必ずしもすべての民族が地域社会について関心・意識を共有しているわけでなく、互い異なる並行世界の中で暮らしている。それゆえに州全体として農業近代化を推進するのが困難になっていると考えられる。

（３）アホミヤと他の民族との関係性を明らかにするために、聞き取り調査と現地観察を行った。近隣に住む民族のうち外来ムスリム

（ベンガリ）は最も遅い時代に移住してきたために耕地面積が限られており、彼らの一部がアホミヤの村落に入り込んで賃金労働に従事していることが分かった。特にアホミヤの村落で最近進んでいる耕地から養殖池への土地利用転換において、ベンガリが重要な役割を果たしていることが分かった。また、在来トライブであるボドはベンガリと並んで相対的に教育水準が低く、農業生産性も低位にとどまっているが、彼らが自治県を設立したために、域中に住んでいた非ボドの住民の一部が域外に移住する動きが出ており、そのために現在アホミヤが暮らしている地域の土地の価格が高騰している。この影響でアホミヤ村落の中には耕地を売却する世帯も出ており、農業意欲の低下、農業離れが進む一因となっている。このように民族間の関係性も、多数派のアホミヤ村落で農業新技術の導入が進まない要因の一つであると考えられる。

（４）以上の結果より、これまでアッサム州の農業開発においては、各民族がおかれてきた社会経済的状況について考慮されることがなかったが、アッサム州の農業の持続性を考える上で、今後は民族間の関係性を積極的に評価することが必要であると考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　7　件）

①浅田晴久（2018）「書評　R. B. Singh and Pawel Prokop 著『Environmental Geography of South Asia: Contributions toward a Future Earth Initiative』Springer, 2016」,『広島大学現代インド研究』8 巻, 57-60 頁.

② Haruhisa Asada (2017)「Rice-based cropping system of different ethnic groups across the Brahmaputra floodplain in Assam, India」,『Journal of Agroforestry and Environment』11(1&2), 67-70. 査読有.

③ Haruhisa Asada, Daisaku Sakai, Jun Matsumoto and Wataru Takeuchi (2017)「Hydrological environment and Boro rice cultivation in Bangladesh and Assam」,『Journal of Agroforestry and Environment』11(1&2), 25-29. 査読有

④ Fumie Murata, Toru Terao, Hatsuki Fujinami, Taiichi Hayashi, Haruhisa Asada, Jun Matsumoto, Hiambok Jones Syiemlieh (2017)「Dominant Synoptic Disturbance in the Extreme Rainfall at Cherrapunji, Northeast India,Based on 104 Years of Rainfall Data (1902-2005)」,『Journal of Climate』30, 8237-8251. 査読有. DOI=10.1175/JCLI-D-16-0435.1

⑤浅田晴久（2017）「インド・アッサム州, ブラマプトラ川氾濫原におけるムスリム移民の生業活動と土地利用－ヒンドゥー教徒住民との比較を通して－」,『広島大学現代インド研究－空間と社会－』7, 1-18, 査読有.

⑥浅田晴久（2016）「いかに気候資源を利用するか－インド農村における環境適応技術の事例より－」,『地域生活学研究』7, 139-149. 査読有.

⑦Yasuyuki Kosaka, Bhaskar Saikia, C. K. Rai, Komo Hage, Haruhisa Asada, Tag Hui, Tomo Riba and Kazuo Ando (2015)「On the introduction of paddy rice cultivation by swiddeners in Arunachal Pradesh, India」,『TROPICS』24(2), 75-90. 査読有.

〔学会発表〕（計　16　件）

①浅田晴久,「インド・アッサム州の生態環境と多民族社会の人口分布」, 日本人口学会関西地域部会, 於大阪大学, 2018 年 3 月 17 日.

②Haruhisa Asada,「Farm abandonment in Japan and Assam」, The 1st International Cultural Symposium on North East India and Japan, 於 Presidency College, Imphal, 2018 年 2 月 28 日.

③浅田晴久,「インド・アッサム州の離農の現状」, 国際研究集会「アジアにおけるグローバル問題群を考える－南アジア諸国と日本の比較を中心に－」, 於奈良女子大学, 2017 年 12 月 17 日.

④Haruhisa Asada,「Rainfall variation and rice cropping technology in Assam, India」, XXXII Annual IAPT Convention 2017, 於 Gurukula Kangri University, 2017 年 10 月 30 日.

⑤浅田晴久,「南アジア・東南アジアの境界地域における風土」, 日本地理学会モンスーンアジアの風土研究グループ例会, 於三重大学, 2017 年 9 月 30 日.

⑥浅田晴久,「インド・アッサム州の自然と社会－南アジアと東南アジアのはざまで－」, 第 13 回ジオコミュニケーションセミナー, 於香川大学, 2017 年 5 月 22 日.

⑦村田文絵・寺尾 徹・藤波初木・林 泰一・浅田晴久・松本 淳,「インド・チェラプンジにおける降水量の長期データ解析」, 日本地

理学会 2017 年度春季学術大会, 於筑波大学, 2017 年 3 月 28 日.

⑧浅田晴久,「インド・アッサム州における多民族社会の存立構造」, 日本地理学会 2017 年春季学術大会, 於筑波大学, 2017 年 3 月 29 日.

⑨浅田晴久,「アッサム州におけるアホミヤ、ボド、ネパリの村落生活」, 第 11 回南アジアにおける自然環境と人間活動に関する研究集会－インド・バングラデシュと周辺諸国における防災知識の共有を考える－, 於京都大学, 2016 年 12 月 24 日.

⑩浅田晴久,「インド農村の暮らし－変わるものと変わらないもの－」奈良県ユニセフ協会共催 公開講座, 於奈良女子大学, 2016 年 10 月 15 日.

⑪Haruhisa Asada,「How are people in Assam living with environment ?」, National Seminar on North-East India: Society and Environment, 於 Gauhati University, 2016 年 3 月 30 日.

⑫浅田晴久・ニッタナンダ＝デカ,「インド・アッサム州、ムクタプル村の 10 年間」, 2015 年度 JCAS 次世代ワークショップ企画：災害をいかに地域に伝えるか－南アジアにおける気象学と地域研究との協働－, 於京都大学, 2016 年 2 月 6 日.

⑬ Haruhisa Asada,「Environment, Livelihood and Sustainable Development in the Brahmaputra valley, Assam」, Bi-Lateral Seminar on Kyoto University Initiative for Strengthening Collaboration between India and Japan, 於京都大学, 2016 年 1 月 14 日.

⑭村田文絵・寺尾徹・林泰一・浅田晴久・松本淳・H.J. Syiemlieh,「インド・チェラプンジの雨の長期解析」, 日本気象学会 2015 年年度秋季学術大会, 於京都テルサ, 2015 年 10 月 28 日.

⑮ Haruhisa Asada,「Differential Livelihood and Land Use Patten between Immigrant and Indigenous Communities in Assam」, 日本南アジア学会第 28 回全国大会, 於東京大学　2015 年 9 月 26 日.

⑯浅田晴久,「インド・アッサム州、ブラマプトラ川氾濫原における在来民と移民の生業活動と土地利用」, 京都大学現代インド研究グループ 1-C「南アジアの資源・環境問題」第 1 回研究会,　於京都大学, 2015 年 6 月 21 日.

〔図書〕（計　1　件）

①浅田晴久（2018）「インドの農業」, インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』丸善出版, 628-629 頁.

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

○取得状況（計　0　件）

〔その他〕
ホームページ等
http://koto10.nara-wu.ac.jp/Profiles/13/0001261/profile.html

６．研究組織
(1)研究代表者
浅田　晴久（ASADA Haruhisa）
奈良女子大学・人文科学系・准教授
研究者番号：２０７１３０５１

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし